

1 里山と水田・稲作分科会

～田んぼが育む生きものと子供たち～

① 茂原農業高校 農業土木部による報告



② 田尻高校 岩淵氏による基調講演



④ 高校生を含めたパネルディスカッション

③ むらおこしシンガー 田中卓二氏による歌



まとめ

1. 高校生のよな若い力
2. 農村社会の人間関係の再構築
3. 農業をしながら自然を見る精神的なゆとり
4. 地域にあった人と自然が共生できる農法の確立

必要です

水田稲作分科会では4月23日茂原市の茂原農業高校文化ホールで分科会を開催しました。分科会では、生き物の視点から田んぼを見直し、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換してつための方向性を、次世代を担う高校生を交えて検討いたしました。シンポジウムでは初めに、茂原農業高校農業土木部が部活動で実践している、一宮町で30年間放棄された谷津田再生の取り組み状況を報告、荒れた谷津田を再生させた時の達成感、生き物が戻ってきたときの驚きと喜び、その方向性がこれから千葉県での農業を楽しくやりがいを感じられる農業のあり方であることを、高校生から改めて思い知らされました。

つづいて、宮城県立田尻高等学校教諭の岩淵成紀さんからは、「ふゆみずたんぼの生きもの曼荼羅」と題し、基調講演をしました。岩淵さんは生き物を活用した農法を例に挙げ、自然を大切にすることを農業に感じられるようにすることが大切だと思う、と語りました。

ミニコンサートでは村起こしシンガー田中卓二さん、音楽とトークにより田んぼと自然再生について楽しみながら理解を深めました。

パネルディスカッションでは、田んぼの仕事でも、今効率化のために、一人一人が孤立化してしまい、人間関係が崩れてしまった、人間関係の再構築が必要だということや、農業は重労働のイメージだが、毎日違った自然に出会える楽しみがあるという話がありました。以上まとめとして、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換していくためには、高校生のよな若い力、農村社会の人間関係の再構築、農業をしながら自然をみる精神的なゆとり、その地域にあった人と自然が共生できる農法の方法や技術の確立、以上4つが必要であるとわかりました。以上で報告を終わりにします。(渡邊英二)

2 里山と生物・ビオトープ分科会

～谷津田・里山における生物多様性の体験～

場 所：千葉市緑区大和田
 実施日：2006年5月1日(日)
 10:00～12:30: 観察会と生きもの調査実践
 14:00～16:30: こどもたちの企画による谷津田・里山遊び
 参加者：70名(2～75歳)

●趣旨
 人が過度に手を加えることによって、
 生物多様性が維持されている『里山の自然』

<昨年> データをあげて学術的に評価

<今年>

・観察会・生きもの調査 → 生物多様性体験

・こどもの企画で里山遊び

里山＝安全で楽しい遊び場

観察会と生き物調査



午後は、こどもたちが企画した谷津田・里山遊び

谷津田・里山は、
 生きものだけでなく、
 こどもたちも育てていた



こどもスタッフ



生きものジェスチャー

人も生物多様性の要素

●課題: 同様の活動を他地域で実践していくには...

生物・ビオトープ分科会では、谷津田と里山における生物多様性の体験ということで、5月1日に千葉市緑区下大和田というところでイベントを行いました。この場所は千葉市が調査した63箇所の谷津田のうち、最も自然度の高い生き物が豊富だと評価されている場所です。生物・ビオトープ分科会は、「人が過度に手を加えることによって、生物多様性が維持されている『里山の自然』」というメインテーマを掲げております。昨年は里山のデータを挙げて学術的に評価しました。今年は観察会や生き物調査をすることによってそれを体験してもらおう、それからこどもの企画で里山遊びということで、里山は安全で楽しい遊び場だということを検証してみたいということでイベントを行いました。これが観察会なんです、午後は、子ども達が企画した谷津田里山遊びということで、子ども達が全部企画しました。中学1年生の翔くん、小学4年生の千春ちゃんと瑞紀ちゃん、年長のげんちゃんです。この子たちが3つくらいイベントを考えました。気が付いてみたら、谷津田里山は生き物だけではなくてこのような子ども達も育てていたということです。この子達がここに関わったのは4～5年前からで、げんちゃんなんかオムツをはきながらイベントをやっていました。課題としては、同様の活動を他の地域でどのように実践していったらよいか、非常に大変だなあと感じました。以上です。

(田中正彦)

3 里山と教育・学習分科会

「里やまは人づくりの場」

●野外体験1

「里やま歌集・野草調理と講演」
千葉市立みつわ台北小中学校 4月29日(日) 参加105名
・講師：小平新夫(千葉県森林研究センター長)
亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)

●野外体験2

「生態園での自然教育実践」
千葉県立中央博物館生態園 5月7日(土) 参加25名
・講師：中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
林浩二(千葉県立中央博物館生態学研究所)
亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)
寺嶋嘉音(森林文化教育研究会幹事)

●シンポジウム

「自然体験はオマケじゃない」
千葉県立中央博物館講堂 5月7日(土) 参加132名

- ・里山と環境教育の意義：大槻幸一郎(千葉県県民館館長)
- ・自然体験はオマケでなし理由：中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
- ・里山は人づくりの場：岡井進也(東京大学名誉教授)
- ・パネリスト：亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)
中村(こすのびよう保育園園長)
浅野誠(千葉県立精神科医療センター長)
海上真(森林インストラクター)
- ・総合司会：鈴木敏(NPOみどりのネットワーク千葉)

・オカリナとギター演奏：山口幹夫ほか

・わらべうた：なまき保育園、たいよう保育園、たいよう保育園の園児のみなさん



「自然体験はオマケじゃない」シンポジウム



なまき保育園、たいよう保育園の園児による「わらべうた」でシンポの会場が和む。

3 まとめ：里やま問題解決のキーワードは教育にあり！

●現状

- ・物が豊かな社会になった半面、人の心の問題が深刻化
- ・子どもの車椅子、引きこもりの増加、少子化率が増加
- ・子どもの遊び、家庭でのテレビ・パソコンの増加
- ・「里やま・自然体験」が減少

●結論

- ・基盤文化の根を腐らせてはならない、里やまの喪失は都市の凋落につながる
- ・里やまでの自然体験は人としての大層をつくる
- ・自然体験は子どもたちの感性を磨き、教育(生きる力)の原点である
- ・子どもの遊び・自然体験の「時間・空間・仲間」の三間の確保は大人の責任

●課題

- ・学校教育における総合学習の重要性の正しい認識
- ・社会教育が子どもの自然体験の場をどのように支援するか
- ・社会の在り様を子どもの視点で考える



教育・学習分科会は、我が国生活文化の伝承。幼少期に里山の自然に触れ、「情緒・感性」を育てる観点で「里山と子ども」という命題を実践しています。

4月29日《緑の日》千葉市若葉区みつわ台北小学校をベースに近隣の東寺山、原町、源町など里山を訪ねました。この日原町の谷津田では田の神、水の神に豊作を祈願する神事があり、集落の方々と交歓する一幕もありました。観察後は採取した野草を家庭科教室で調理。参加した105名が自然の恵みに感謝しました。

5月7日(日)千葉県立中央博物館(132名参加)。午前には生態園で草木遊びなど子ども向けの遊びを修得。午後は講堂でシンポジウム「自然体験はオマケじゃない」をテーマに4人の発表者がパネル討議を行いました。冒頭大槻副館長が挨拶し、千葉県里山条例誕生の逸話を紹介。中村中央博物館副館長が、大脳と自然体験の密接な関わりを講演。筒井東大名誉教授が「里山は人づくりの場」と題して基調講演を行いました。

まとめ)〔現状〕物が豊かになった半面、心の問題が深刻化。キレる子ども、引きこもりの増加。子どもの遊びは、ファミコンなど屋内が増加し自然体験などの屋外が減少。

〔結論〕里山の自然の豊かさが人の心を育てる。子どもの遊び「自然体験の、時間、空間、仲間」など三間の確保は大人の責任。農林業など基盤文化の根を腐らせてはならない。里山の疲弊は都市の凋落につながる。自然体験は教育のオマケではない。

〔課題〕学校教育で「総合的な学習の時間」の重要性を認識し、正しい指導力を発揮して欲しい。社会教育が子どもの自然体験を如何に支援するか。社会の有り様を子どもの視点で考える。

(上善峰男)

4 里山と森林・林業分科会

市民の暮らしと森林の未来 ～森をつくる地域循環型の暮らし～

共催：東金市

●自然体験

日時 2006年4月30日(土)9:30～ 参加者 49名
受付開始 東金市文化会館エントランスホール
10:00～12:00 森林ウォッチング
福の森～あしの森

●シンポジウム

日時 2006年4月30日(土)
会場 東金市文化会館2階会議室 参加者 53名
昼食、交流

パネラー

吉岡 賢：山武都市森林組合 組合長
東金市建設部都市整備課 東金市経済環境部農政課
東金市経済環境部環境保全課
本間 一夫：さんむフォレスト
コーディネーター：稗田 忠弘：さんむフォレスト

その他パネル展示

東金市建設部都市整備課 東金市経済環境部環境保全課
東金市経済環境部農政課 市環境情報センター
さんむフォレスト

プレゼント 東金市建設部都市整備課から花の種をプレゼント



4 まとめ：地域循環型の暮らしが森をつくり、地域をつくる！

●現状

- ・戦後の無理な拡大造林の後、森林の手入れが出来ていない
- ・東金市は市民による森づくりなど、市民の自然体験を支援している
- ・山武杉を活用した住まいづくりなど、地域循環による森林再生運動の実施

●結論

- ・森林の木材生産以外の多面的機能を守るために人の手が入る必要がある
- ・地域循環型の暮らし方が、地域の森や自然を守る力になることを再確認する

●課題

- ・木質バイオマスエネルギーの利用など、森林が暮らしと結びつく仕組みづくりが必要である
- ・林業が産業として成立する形で市民参加と行政の協力を考える必要がある



森林・林業分科会は、山武杉の産地・東金市を会場として、東金市役所との共催で分科会を開きました。午前には東金市民がつくる森林公園をウォッチングし、午後はパネルディスカッションを行いました。森林が美しかった過去について知り、現在の状況を理解して、森林の未来を考えたというのがパネルディスカッションのねらいです。

生活資源の多くを森林に依存していた時代は、地域の暮らしと森林が美しく調和していた、という過去の話が基調になりました。現在、地球温暖化が大きな問題となっているなかで、木材が理想のエネルギー源といわれながら、木材業界の中では端材や残材の処分に困っていること、利用しようとするれば現代の暮らしの中で、利用できるテクノロジーが身近にあること、などを明らかにし、市民が木材の産地、エネルギー源としての木質バイオマスの産地に、暮らしている恩恵にあらためて気づくことが、森林再生に関心を持つ第一歩になるものと考えました。東金市の田んぼの学校の取り組みからは、林業へ多くの示唆を得ました。田んぼの学校は、農民が遊休農地を利用して、有償で一般市民に農業指導をする農業の一形態ですが、農民の発想の背景に、農業という職業の公益性の自覚と、農業者としての誇りがあります。

森林所有者に森林の公益性と林業の重要性がしっかり自覚されてこそ、市民参加の森づくりのあり方が、明確になってくるものと思います。昨年の第1回里山シンポジウムでは、市民、森林所有者、行政のそれぞれの役割に応じた、相互協力システムの構築が必要である、と提言しましたが、今回はそれを受けた一つの成果として、継続的な議論の場をつくるのが出来たものと思います。

(稗田忠弘)